第２回テキスト

布を絞る

４月分

は　じ　め　に

いつもより早く桜が満開となり、慌ただしく種を育てています。皆様はお送りした種を蒔きましたでしょうか。寒い地方の方は、蒔く時期を心待ちにされていることと思います。どのくらいの方が蒔かれたか気になりつつ、第２回の原稿を書いています。霜が降りると、せっかく芽が出ても枯れてしまいますので、天候を見極めて蒔いてください。ビニールハウスや覆いなどを利用すると、早く植えることが出来ます。

暖かい地方の方は、順調に芽が出ましたか？今年の天候だと３週間くらいかかると思いますが、２週間位経っても芽が出ないときは、雀に食べられたり、寒さに当った疑いもあります。よく観察してください。プランターで育てている方もできるだけ多く育ててください。

いつまで経っても芽が出なかったり、苗が大きくならない時は申し出てください。一年間の実習ができなくなりますので、お力になれるように致します。また、藍の量が不足している方は6月頃にお知らせください。こちらもご協力させていただきます。

何か質問や疑問がありましたら、質問用紙に書いてお送りください。昨年のデータを見ますと、一度も質問用紙を使われなかった方が何人かおられました。私が忙しいだろうと、気を遣って下さった方もあるようでしたが、不明のまま過ごされるのは、私の望むところではありません。納得の行くまでお話し合いをしたいと思います。質問の他、私の予測しない色を出して、送ってくださった方もありました。こんなことを教えて欲しい、もっと詳しく書いて欲しい等のご要望も取り上げていきたいと思っております。

ではさっそく、よくあるご質問のひとつについて説明いたしましょう。

Ｑ.「実習に必要な量を作るにはどの位の広さの土地が必要なのか？」

Ａ．１ｍ四方の土地から生葉で３００ｇ、乾燥葉で４０ｇ（ただし、順調に育った場合）収穫できますので、これを２回収穫することを前提に計算すると、５ｍ四方の土地があれば、全実習のうちすくも以外の体験をすることができます。

すくもを造るには最低でも３ｋｇの乾燥葉が入用ですので、１０ｍ四方くらいの広さが必要となります。一応、種はその広さの量をお送りしていますが、不足の方はお早めにお問い合せください。

なかには、プランターでないと育てられない方もおられると思いますので、プランターに間を詰めて植えても（ベタ植え）良いと思います。１３ヶくらい植えられるとかなり収穫することができます。少ない量の葉で染められる方法も紹介していきますので、お好きな技法を選んで体験してみてください。

絞りの技法５種類

今回は、藍が育って染められるようになるまでの１ケ月間を利用して、染めの技法を解説します。まずは布に絞りを施す技法を解説します。ここでは、私独自の技法も取り上げることにしました。見本や写真を添付しますので、参考にご覧ください。

藍染めを布以外に染めたい方もあると思います。今後、講座の中で糸や和紙などの染めも取り上げたいと思っております。絞りが不要の方もあるかと思いますが、ご了承ください。

Ａ.かご染め絞り　（写真①、②、別紙写真、Ａ-染め見本）

同じかごを２つ用意します。一つ目のかごに乾いたままの布をひねったり、しわを寄せながら詰め込みます。もう一つのかごを、上から押さえに置きます。紐で縛って固定します。写真①のようなあられ炒り用の網かごが大変便利です。布を濡らしてからしわを寄せると、にじむ感じでまた違った模様になります。

写真①・②は、【２０分藍甕（あいがめ）に浸ける→２０分上げて酸化する】、を３回繰り返して染めています。藍の状態によっては、４～５回繰り返して染めます。この他、ハンカチやスカーフ等小さいものは、茶漉しなどを使用します。手で握り染めるだけ

でもこの様な模様をつけることができます。

　もう一つ、新しく考え出した方法をご紹介します。別紙「かご染め絞り作品例」の写真（上）のような鍋敷き（100 円均一で購入できます）の穴を利用します。粗い目のかごでもかまいません。写真（下）はこの方法でタオルを染めたものです。タオルの表（糸が出ているほうが裏）を下向きにして鍋敷きの上に載せます。その上から指でタオルを鍋敷きの穴に押し込むようにすると、写真（上）のような状態になります。その向きのまま（写真とは逆向き）藍甕に浸けて染めます。

※公開はここまでです。